

---

# 名状しがたい蟲飼貴子

誇大紫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名状しがたい蟲飼貴子

### 【Nコード】

N6883N

### 【作者名】

誇大紫

### 【あらすじ】

卒業を控えた中学生、蟲飼貴子は怪物としか思えない見た目である。直視した人々にはあまりのおぞましさに気絶した者さえいるほどであり、クラスメイトに避けられる透明人間のような日々。しかしそんな貴子にも、好きな人はやっぱりいるのであった。

美が見る者の瞳に宿るといふのなら、醜さも見る者の瞳に宿るのは必定。蓼食う虫も好き好きといふことわざもある。しかし世の中にはそんなものを押し退け圧倒的多数に確固として存在する「醜さ」というものがある。

蟲飼むしかいというどこか気持ちの悪い名字の通り、貴子はどこか気持ちの悪い娘であった。会った者は皆、名状しがたい不安に襲われ逃げてしまう。それがどういった類のものであるのか、誰にも説明はできなかった。

貴子自身も鏡に長時間向かっていると、言い知れぬ吐き気を催すほどである。いかに女子中学生らしく澆刺とした笑顔を作ったところで、内臓にできた腫瘍が蠢いたようにしか見えない。自然、周囲からは見ることを避けられ、まるで透明人間のようなものである。

そこにいるだけでクラスメイトの食欲さえ減退させてしまう容姿。それを気にして、彼女は昼休みの校舎裏でたった一人、弁当を開く。しかし当然のことながら箸は進まず、すぐに弁当をしまいこんでしまった。

「あーいたいたせんぱーい」

首を曲げると大声で手を振ってくる娘がいる。じっと見ていると、バケツに踏み入り滑って転んだ。

気にせず貴子は足元の蟻を見た。バケツのくぐもった音がして、後輩が駆け寄ってくるのがわかる。貴子の口許が緩む。

「もー助けてくださいよ。薄情ですねー蟲飼先輩は今日もキモいですねー」

太眉ショートあやのの娘は、にこやかに笑った。

貴子は無表情。そんなことはとうに承知であるといったところである。しかしやがてため息を吐いた。

「彩乃ちゃんあやのったら……もう」

貴子は後輩の足からバケツを外してやる。彩乃はてへっと舌を出した。

「一緒にご飯食べましょうよー」

「ごめんね、もう食べ終わってるの」

話を聞いていない様子で彼女はハムカツバーガーのラップを剥がし始めた。かぶりついてむぎゅむぎゅ咀嚼しつづけた。

「はら待っへへくらはいよー」

貴子は、この娘ホントに仕方ないな、と口許から垂れているトマトソースを拭ってやった。

「聞いてくださいよー。ウチ、最近はお腹筋を攻めててー、いよいよ六個に割れたんですよー」

そう言ってセーラーを捲って見せた。美しく焼けた肌に引き締まった腹があった。

「次は上腕二頭筋を攻めようと思うんですけどーどう思います？」  
カッチカチやぞ、と力こぶを得意げに見せつけてくる。貴子は、自分の容姿と比べなんて美しいのだろう、とは思わなかった。

アレは別に。

「ちょっと理解できないのだけれど。どうして私、上腕二頭筋について意見を求められてるのかしら」

「やー、先輩は何でも知ってるじゃないですかー。どうかなーって知ったことか。あまりにも無茶な質問に笑いが出た。

彩乃はにんまりと笑った。

「ところでさっきの授業で、将来何になりたいか書いてこいって言われたんですけどーまだウチ二年だから具体的なことは聞かれないんですけどー三年ってどうなのかなーって」

先輩はどうするの、と言外に聞いている。貴子は顔を曇らせた。

「私は、進学する」

目を合わせずに答える。足元には誰かが落とした飴玉があった。そばに蟻が一匹徘徊していたが、先程からそれを見つけられずにいた。

「それで柳野先生やなぎのは？」

ハッと貴子は顔を上げた。しかしその口は冷凍された貝のように開かない。後輩は頭を掻いて数秒考え、口を開いた。

「そういう気持ちは卒業と同時に棄てるんですか」

蟻は巢に帰っていく。入れかわって、他の蟻が出てきた。

「別に棄てるつもりはないけど……今じゃなくても、だよ」

急に子供っぽい口調になる。それを聞いた彩乃は明らかに御不満といった様子である。

「先輩がそれでいいってんなら、ウチはいいです」

新しい蟻は即座に飴玉に向かっていく。貴子はじっと見ている。

「でも、先輩に対してそんなに分け隔てなく接してくれる人なんてそうそう見つからないでしょう」

目を合わせない貴子に強い口調で、断じるように話す。

「もしこれから先輩がそういう人と出会っても、そこまで仲良くなれるかって思ったら疑問ですね。だって、ここで一度逃げてるんですから。先輩はまた逃げるでしょう？」

貴子は飴玉を蹴飛ばした。鮮やかな水色の球は草むらに消えた。

「彩乃ちゃんは言うだけだから、ラクよね。私は、こんな見た目とこんな性格で、先生という高い壁の向こうにいるあの人へ——飛ばなければならぬの。その気持ち、わからないでしょ？ わかるわけない！」

彩乃は貴子の怒った顔を初めて目の当たりにした。名状しがたいショックで固まり、走り去っていくのをただ眺めているだけである。ふと気づけば呼び止めようとした手が宙に泳いでいた。

なあなあで、特に先輩の生き方に干渉せずにいることだってできた。しかしそうするのは——何かを見て見ぬフリをするのは——先輩の存在を無いように扱っている人々と大差ないのだと彩乃は思った。そう思ったら、言ってしまったのである。

「そりゃ誰だって他人のことを全部わかるわけないでしょうが！」

彩乃は食べかけのハムカツバーガーを投げ捨てようとした。

「……それでもわかりたいんですよ」  
静かにまた食べ始めた。

一週間が経った放課後、貴子は柳野と二人で向かい合っていた。  
教室の机を移動し、二者面談をしていたのだ。

机の上には成績表と、貴子が書いた進路希望用紙が置かれていた。  
「名<sup>な</sup>吞<sup>のみ</sup>高校でいいんですか。蟲飼さんならもっと近くで、もっとレベルの高い高校に進めますよ」

白髪混じり、痩せた三十代の教師が言った。穏やかでかすれた声。  
竜安寺石庭に佇んでいそうな男である。

「先生、わかってるのでしょうか？ 私、レベルだとかそんなじゃない  
くて――」

柳野はふと窓の外を眺めた。夕焼け空が恐ろしいほど真っ赤だった。  
顔を戻さずに呟く。

「貴女は整形して、新しい人間関係を築きたいのですね」

生温い風が二人の頬を撫でた。貴子は柳野の横顔に見とれていた。  
一瞬にして記憶が蘇る。一年生の終わり、自分は教室にいてはい  
けない人間なのだと、休み時間の度に手を洗いに行っていた。

神経質な人間を演じること。見た目と反する清潔な人間を演じること。  
自分は教室から逃げてきたのではなく目的があって出てきた  
と思い込むこと。それらが一体となって腹中で黒いとぐろを巻き、  
貴子を動かしていた。

校庭にある水道の蛇口を一つ捻り、必要以上の時間をかけて石鹼  
を泡立て丁寧に洗う。爪の先、手首、指の間。石鹼を引っ搔く。そ  
れが済むともう一度。もう一度。もう一度。

時折通り掛かる生徒の一部が貴子の顔と挙動不審ぶりをネタにし  
て笑う。

貴子はもうそれに慣れていて、一緒に笑うようになっていた。実  
際何が面白いのかはわからないが、とりあえず空気を止めずに済ん

だことにほっとする。

生徒達が消えた後、柳野は溜息を吐きながらやってきた。一部始終を見ていた様子で。

「何ですか」

当時の貴子には、彼は不真面目な世界史教師という印象しかなかった。寝ている生徒や携帯をいじくり続けている生徒を見ても注意することなく、淡々と授業を進める。

「ああいうのはイジメでしょう。貴女がどうしてもほしいか言えば、僕は対処できます。まあ、教師が介入するとややこしくなることも多いのですが」

柳野と目を合わせると、困った顔をしていた。話はまだ続きそうである。貴子は身構えた。馬鹿にされてなぜ笑っているのか。そう言われると思った。

「その靴下、不思議な柄で可愛いですね。まあ、校則違反ですけど。それから、後で職員室に來なさい。ハンドクリームの余ったのをあげます」

そうして柳野は笑った。貴子は頬のこけた横顔を神妙な目つきで見つめていた。

貴子は今、同じ眼差しで目の前の担任教師を――初恋の人を見ていた。

先生……馬鹿なことかもしれませんが、あの時のたった一言が私を救って――そして、私は恋に落ちたのです。

「先生」

ぽつりと出た声に、柳野は振り返る。

「何でしょう」

貴子は静止画のように黙っている。

――先生。

先生。

どうして私、中学生なんでしょう。どうしてこんな容姿なんでしょう。どうして大事な友達と喧嘩しちゃうんでしょう。

聞きたいことがこんなに沢山あるのに。

先生。

先生。

私、まだ先生の生徒でいたいよ。

「――質問が無ければ、二者面談は終わりますよ。貴女は大人で良いですね。自分が何をしたいかわからない人も多いんですよ。貴女は一人で決めることができる。揺らぐことなく立っている」

いいえ先生、違います。私はどうしようもなく子供なんです。貴方が近くにいろと言えばきつとそうしてしまうでしょう。私はもうずっとあの時から、貴方の一挙一動に一喜一憂して死にそうになるんです。自分の悍ましい容姿すらわきまえずに。

貴子は、質問がありますと手を挙げた。顔は俯いたままである。

「私、先生のことが好きです」

柳野は微動だにせず、かと言って驚愕の表情を浮かべるでもなかった。ただ、風にそよぐ葦のように穏やかに貴子の瞳を見た。それは垂れてめくれた肉に半分隠れていたけれど、濡れた黒真珠のようだった。

「ありがとうございます。私もあなたは好きですよ」

教師は口許をほんの少し緩ませたのみで、極めて事務的にフラットに答えた。手慣れた様子で、それは女子中学生の気の迷いですけどねと言われているようだった。

貴子はそれが自分の求めていた答えでないことだけわかった。しかし自分が一体、何を欲しかったのか、何なら満足したのかわからなかった。このまま先生を無理やり――傍から見ればチープなB級ホラー映画のようだろうが――襲うことも考えないではなかった。

「女子中学生と付き合うのは、ありませんか」

それも一つある、と教師は呟いた。

「まだ何か？ 先生は優しいから、私をただの女子中学生として見てくれて……」

教師は何も言わずに聞いている。



「でも私は、先生に特別視されたかったです。誰にも認めてもらえない怪物でも、先生にさえ気にかけてもらえるなら。先生が軽く目で挨拶してくれるだけで、私は」

席を立つと机が大きな音を立てた。貴子は柳野に詰め寄った。彼は正視してびくりと戸惑いながらも、軽く微笑んだ。

「ダメですよ。貴女はまだ私を『先生』と呼ぶことから抜け出せないでしょう？」

柳野は部屋に迷い込んだ蝶を優しく窓から放すように、ゆっくりと話した。

「そう……ですか」

貴子は崩れ出す声を必死に押し止めた。俯いた瞳は前髪に隠れている。唇の震えを手で隠す。

「あり……がとう、ございました」

柳野は窓の外を見ながら、うん、と言った。

翌日の午前は曇天。校舎内は仄暗い水族館のようである。

休み時間、彩乃は廊下を走っていた。引き締まった体が他の生徒をひよいひよいと避けていく。階段を三段とびに駆け上がり、屋上のドアを開くと授業開始のチャイムが鳴った。

「あーいたいたせんばーい」

ぶよぶよの不格好な後ろ姿がフェンスにのしかかっていた。彩乃は呼吸を整えて近づいた。

「授業、出なさいよ」

貴子は背中越しに声を出した。

「先輩こそ、こんな時期にサボって内申悪くする気ですか」

貴子は今にも降り出しそうな空模様を見上げる。湿っぽい風が二人のスカートを靡かせた。

「燕が飛び回ってる。じきに雨よ。教室に帰りなさい」  
振り向かない。彩乃は隣に腰かけた。

「燕なんて見えませんねー」

彩乃の目には黒い点が行き交うようにしか見えなかった。

「どうしてあなたは、私のところにやってくるの。どうして私の顔を見ても平気なの」

平気じゃないですよ、と彩乃はポケットから眼鏡ケースを取り出した。

「ウチ先輩と会う時は眼鏡外してんですよ。だってこんな距離で直視するとキツイじゃないですかー」

貴子は絶句した。遙か空高くから氷のつぶてが落下して胸の辺りを直撃したようだった。

「それでも先輩に会いにきてたのは、面白いからですよ」

笑い者にする、という意味ではないことくらい貴子にはわかってる。それでも疑わずにはいられない。

「不細工な私が？」

「先輩の話が、です。なんでも知ってるから」

貴子は怪訝そうな顔つきになった。なんでもなんて知らない。知っていることしかわからない子供なのだ。

「私、自分のことさえ知らないのに。この見た目も、先生とどうしたかったのかも」

彩乃は先輩の手を取った。その顔はあまりにもあっけらかんとした元気に満ち溢れていて、貴子は嘔き出した。

——こっちのネガティブマインドにはお構いなしかよ。

「先輩、決めましたよ。ウチ将来、言語学者になります。世界中の言語から、今の先輩のことをうまく表現できる言葉を探してあげます」

貴子には何を言っているのか理解できなかった。そんなことで将来を決めていいのか。自分はそのうち整形するというのに。

「今の先輩のこと……それをぴったり一言で言い表せるような言葉を。なければ作りますよ。先輩は、整形してウチのこと忘れるつもりでしょうが、そうは問屋がおろしませんよ。ウチはノーベル賞を

取るんです。先輩にもわかんないその気持ちに名前をつけて、世の中の鈍感なバカどもが一斉にハッとするんです。素敵じゃないですか」

貴子は呆然として佇んでいた。雨がぽつりと髪に落ちてきた。彩乃は真剣に続ける。

「ダメだったら……ボディビルダーになりますよ。兼業でも良いですね。言語を研究するかたわら、ボディビルダーもやってますっていう」

雨が降り出した。土砂降りの中、貴子は大笑いしていた。彩乃も濡れた髪をかきあげ、腹を抱えて笑った。

「先輩、ウチの覚悟、見てて下さいよー！」

彩乃は眼鏡をかけて貴子をまじまじと眺め、ピースサインをしてすぐに気絶した。

「もう、バカじゃないの……」

貴子は彩乃の頭を撫で、遙か彼方に雲の切れ目があるのを見つけて嬉しくなった。

## （後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。よろしければ感想などお願いします。

当初、彩乃は貴子と対比される美しい娘という設定だったのに、できあがると何故か筋トレ好きの暑苦しい娘になってました。バッドエンドだったはずなのに明るくなってるし、不思議なこともあるものですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6883n/>

---

名状しがたい蟲飼貴子

2010年11月4日13時10分発行